慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大船藤澤附近見學記
Sub Title	
Author	清水(Shimizu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.4 (1930. 12) ,p.168(700)- 169(701)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19301200-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り。境内に別に日蓮上人の參籠せし堂なるものあり。寺寶古文書を瞥見し、直ちに往路を引き返して天神平に戻り昼飯を攝る。二時天神平發、車にて甲府在相川村の武田神社を訪ふ。神社は武田氏居館の存せし古府又は古城と稱せし地に大正五年縣下官民の協力により建立せられしものにして、武田晴信を祀る。往時の廢湟、斷礎今に存し、略武田氏の古館の態樣を推測し得、即ち東曲輪、中曲輪、西曲輪、其の他御隱居曲輪、臺所曲輪など今も猶歴然として指摘し得べし。全館の廣さ凡そ東西百五十六間南北百間餘にして、諸將士の館は此の南西にかけて存在せしなり。社務所に於て社寶を見學す。列車の時刻逼り、爲に割愛せるもの多かりしは遺憾なりき。

斯て再び車に乘じて甲府驛に至り、三時四十六分甲府驛を發し歸京の途につけり。かくして二日に亘る愉快なりし見學旅行は無事終了せり。最後に此の旅行によつて、吾等は今更ながら實地見學の利益と興味とを知り、史學知識の上に啓發せられし所甚だ多かりし事を想ひ、旅行中諸所に於いて見學の便宜を與へられし大方の各位に對し謹んで感謝の意を表する次第なり。（森馨）

大船藤澤附近見學記

昭和五年五月廿五日午前七時卅五分東京驛發。一行教授學生廿二名。八時四十分大船著。

一、田谷の穴。九時十分田谷定泉寺に至り、直ちに田谷の穴を見學。穴は天保頃の物ださうで小高い岡の腹に穿たれ高さ二間許幅一間位もあらうか、延長は廿町にも及ぶさうであるが、大正十二年の震災に諸處崩壞して今は僅か一、二町しか入る事が出來ない。カンテラの光を賴りに入れば、孔道は行くに從つて四方に分れ、天井及兩壁は一面の彫刻。牡丹跳越しの獅子、向獅子、登龍降龍、五葉の松菊唐草等なか〳〵巧なものがある。十八羅漢の水遊といふに次の文字が刻んである。

細工人　當所　米山辨藏
石井友吉
石井左兵衛
佐藤七右衛門
世話方

二、常欒寺。十一時常樂寺に赴く。寺は往時粟船御堂と稱し、北條泰時の剏建する所、寶治年間執權時賴、宋僧蘭溪道隆禪師を京師より請じて開山とした。臨濟宗建長寺派といふも實はその根本寺である。堂宇は今見る影もないが、其山門は古色蒼然、座ろに懷古の情に堪へざらしむるものがある。山門を入れば左手に一樹の大銀杏あり、開祖手植と傳ふ。その下に一箇の銅鐘地に下ろされてあり、是即國寶の鐘、鐘銘中に次の文字あり。

寶治二年三月廿一日　左馬允
藤原行家法師法名
生蓮

正面に佛殿。その右に文珠堂あり。本堂は震災に失はれて今礎石を殘せるのみ。佛殿の天井なる八方睨龍の圖は狩野雪信の筆といふ。佛殿の左に小池ありて無熱池といひ、水蓮の花を浮ぶ、

晝食後、少憩して泰時等の墓を訪ふ。寺の後、粟船山の上熊笹の

生ひ茂れる中に徑一間許の盛土あり。これ即一代の名執權北條泰時の遺骸を埋めたる所。以前は向つて左手にあつたのを近頃此處へ移したのださうだ、更に行けば姫宮塚あり、又頂上の畠中に木曾。義仲の長子義高の墓がある。是亦盛土。元此地の西南約二町、木曾兎といふ田間にあつたのを延寶年中に此に移したといふ。三、遊行寺。午後一時四十分藤澤なる遊行寺に行く、この寺は時宗の總本山藤澤山清淨光寺といふのが本名で遊行寺といふ名の起りは、一遍上人を世に遊行上人といつたその根本道場たりしにあるのだが然し當寺の開基は一遍上人ではなくその法孫なる呑海上人である。常樂寺と異り境域は廣大であるが堂宇は震災に全滅して今は假本堂が建てられてゐるのみ。

茶菓の接待にあづかりし後、奥にて六十六世他阿上人無外師の十念を授けられ、一場の法話を受く、古文書、寶物等は震災後倉庫に納められてあるとの事で遺憾乍ら參觀するを得なかつた。小雨の中を境内參觀。後苑の奥まりたる所に宇賀耶神祠あり、又裏門の傍に怨親平等供養碑あり。應永廿三年上杉禪秀の亂に際し、遊行十五代尊敬上人、敵味方傷病者を收容し、戰死者を葬り此碑を建てた、高野山の敵味方の碑と同樣のもので今神奈川縣廳より史蹟に指定されてゐる、明治四十年頃までは辛うじて左の文字を認め得た。

（向つて右側）滿隆公・上杉右衛門左氏憲入道禪秀・上杉五郎憲春・上杉兵庫助氏春・岩松治部大輔滿氏・上杉伊豆守憲方・武田安藝守信滿・上田上野助・今川三河守・疋田右京進・椎津出羽守・今川修理亮・上杉彈正少弼氏定・木戸將監滿範・一色兵部大輔憲元・一良左馬助

（正面）南無阿彌陀佛　刀水火落命人畜亡魂皆悉往生淨土

（向つて左側）應永二十三年十月七日兵亂、至同二十四年於在々所々敵味方爲箭刀水火、落命人畜亡魂皆悉往生淨土故建此塔於前僧俗可有十念者也　應永二十三年十月六日

裏門より十町餘にして長生院（小栗堂）あり、俗傳小栗判官滿重その室照手及び郎黨十人の墳墓がある。

遊行寺を辭して電車にて鎌倉に赴き午後七時解散した。

（清水記）